平成29年3月14日（火）陸奥新報（2面）

健康づくりは「地方創生」

弘大・中路教授が最終講義

短命県返上 取り組みこれからも

本県の「短命県返上」の旗振り役としても知られる弘前大学大学院医学研究科社会医学講座の中路重之教授(65)が今年度末で定年退職を迎える。13日は同大で最終講義を行い「産学官民の協力、人材の集結、地域経済の活性化など、健康づくりは社会づくりであり、地方創生の一つ。プライドを持ってこれからも進んでほしい」と、後進に言葉を贈った。春からは特任教授として同大で取り組みを継続する。（西尾英）

中路教授は長崎県出身。弘大大学院医学研究科を修了、同大学大学院医学研究科長などを務めた。

「弘前大学での40年」と題した最終講義では、同大で行ってきた大腸がんの疫学研究・食物繊維の研究のほか、スポーツ医学や社会医学研究などこれまでの歩みを紹介。また、20年以上前から取り組み始めた短命県返上活動については、データをもとに本県の平均寿命対策を示しつつ「短命県返上に近道はない。どのように社会全体で取り組んでいくかだ」と指摘。「あまり注目されて来なかった健康づくりだが、社会医学的研究を確立させるためには、大学として社会貢献を続けながら自分たちが客観的なデータをとっていくことを忘れてはならない」と語った。

この日は中路教授のほか、感染生体防御学講座の中根明夫教授、薬剤学講座の早狩誠教授も最終講義を行い、会場に詰め掛けた学生や教職員らが熱心に耳を傾けた。

最終講義を終え、花束を贈られる中路教授